

## 新発見の医書『江春記抜書』と田代三喜

遠藤 次郎<sup>1)</sup>, 鈴木 達彦<sup>2)</sup><sup>1)</sup>日本医史学会, <sup>2)</sup>北里大学東洋医学総合研究所

千葉大学図書館玄鼻分館で『江春記抜書』(75981)という医書を見出した。本書を検討すると、これまでの田代三喜に関する通説を大きく覆すのに十分な内容を持っていることが判明した。本書は、積聚や虫に関する42処方を書いた筆写本で、跋文に「江春ヨリ酒井清伝之五帖書之内抜書如右、寛永三(1750)庚午初秋写之、鎮西浄之助」とある。本文中の木香丸の処方に「清伝、虫起ル時可用」とも記されている。この酒井清伝という人物が鎌倉本興寺(日蓮宗)16世日泰上人に堂を建て寄進した、という資料が今日残されている。また、酒井清伝は土気城(千葉市緑区土気町)の城主酒井定隆(1435-1522)と同一人物とも言われている。

一方、本書の原本と推定される『江春庵記』の由来が『寒松日曆』の中にみられる。建長寺16世玉隠(1432-1524)から、1517年に田代三喜の兄に当たる周林蔵主が『江春庵記』を請けたことが記されている(「周林請江春庵記於玉隠」)。また『寒松日曆』には歴代の「江春庵」についても記されており、周林蔵主が三代目江春庵であることが知られる。また、秋田藩田代文書(「田代名字分の事」)の中にも周林が『江春記』を所持していたことを記している。以上の事実を考え合わせると、『江春記』は玉隠から周林に伝わり、これを酒井清伝が借り受け書写したとみることができよう。

以上の伝承の経過を持つ『江春庵記』あるいは『江春記』が今回の発見(『江春記抜書』)によって医学関係の内容を含んでいたことが明らかになった。それも、鎌倉に居住していた田代一族が、足利氏に伴って古河に定住する前後の時代に筆写されている。さらに驚かされるのは、『江春記抜書』に記されている42処方について検討すると、中国の医方書、劉純の『玉機微義』を参照していることがわかる。

曲直瀬道三が『玉機微義』を長年にわたって勉強したことは有名な話で、『道三家譜』によると、道三は本書を師匠の「導道」から教わった、と記している(「享禄4年(1531)初遇於導道而即習素問、読微義、明於古来諸論諸方之可否也」)。演者らはすでに、曲直瀬道三の師匠である田代三喜と導道は別人であることを明らかにした(日本医史学雑誌44巻4号)。「導道」という名の人物は道三の話の中でしか登場せず、客観的な歴史上の人物として確定することが難しかったが、『玉機微義』の関係でつないでみると、「導道」は田代三喜の兄に当たる周林蔵主(=江春庵)である可能性が高い。

以上の事実関係を前提にすると以下に示す『今大路家記鈔』の一文が俄然信憑性を持って伝わってくる。「一説曰鎌倉建長寺有僧、曰江春、曰三喜、曾有明船漂着著金沢、其船中多医書、江春、三喜取之、学医术薬稍彰、道三就三喜学医後受得導道術云」。ここにおいて興味深いのが、「導道」と三喜を別人としているばかりでなく、「江春」と三喜を別人として扱っている。また、田代一族の居住がまだ鎌倉にあったころ、兄の江春庵(周林)も三喜も建長寺の僧であった。そのころ、現在金沢文庫のある横浜市金沢区に医書を多量に積んだ明船が漂着した。兄弟はこの医書類を以て大いに勉強した、ことを記している。以上の一文は、本稿の始めに記した建長寺玉隠の『江春庵記』の流れを汲む『江春記抜書』が中国医書『玉機微義』等を参照したことと関連付けて理解することができる。また、尊経閣文庫の『道三医書』の跋文に、江春庵の医書が「今ニ金沢ノ文庫ニアリ」という一文があり、以上の推測を裏付ける。

演者らは、すでに田代三喜の実像を追求し、三喜は渡明していないことを推測したが、以上の『今大路家記鈔』の説を採るならば、田代三喜も江春庵(周林)も漂着船の医書を勉強したことになる。恐らく両名は渡明して医学を学んだわけではない、と見るのが妥当であろう。